



Title	述語とパースペクティヴ：西田幾多郎『意識の問題』でのパースペクティヴと衝動
Author(s)	森野，雄介
Citation	共生学ジャーナル. 2018, 2, p. 58-81
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/70626">https://doi.org/10.18910/70626</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 述語とパースペクティヴ

—西田幾多郎『意識の問題』でのパースペクティヴと衝動—

森野 雄介\*

### Predicate and Perspective

The Concept of Impulsion on Nishida Kitaro's *Problems of Consciousness*

Yusuke MORINO

### 論文要旨

本稿は西田の前期著作『意識の問題』をパースペクティヴィズムとして読み解くことを目的とする。まず後期西田の個体の相互関係性に関する議論の持つ問題点を指摘し、それを足がかりとして『意識の問題』の持つ独自性に目を向けていく。『意識の問題』におけるパースペクティヴを、衝動的であり、変容可能性を持った「述語面」として捉え、そして、そこから『意識の問題』に特有の自己論を考察していく。最終的に本稿は、『意識の問題』に内在するパースペクティヴィズムを唯一の現実に収斂することのない多世界論として提示する。

キーワード 西田幾多郎、パースペクティヴ、意識の問題、衝動

### Abstract

This paper inquires and explicates the concept of perspective discussed in Nishida Kitaro's *Problems of Consciousness* (1920). Firstly, we problematize Nishida's consideration on individuality and their relationship his theory after 1933 and approach the significance of *Problems of Consciousness*. Then, we elucidate the concept of perspective in that text as the field of modifiability as “place” or “predicative surface [述語面]”. At the conclusion, this paper presents the perspectivism of Nishida in 1920 as the theory of multiple individual that does not concentrates to “the sole real world”.

Keywords: Nishida Kitaro, perspective, impulsion, basho

---

\* 大阪大学大学院 人間科学研究科 共生の人間学 博士後期課程 (morinodayo@live.jp)

## 1. はじめに <sup>(1)</sup>

本稿の目的は、日本の哲学者である西田幾多郎（1870-1945）の前期哲学におけるパースペクティヴィズムの顕在化と、その内実の解明である。

概して、パースペクティヴィズムとは、真理や本質が個体から切り離されて存在するのではなく、個体の持つパースペクティブを通じてのみその把握が可能であるとする哲学的態度を言う。ニーチェによって真理や妥当性を個体のパースペクティブと切り離して考える従来の認識論への批判とともに提示されたパースペクティヴィズムは、ニーチェもしくはライプニッツの哲学を範型としながら、現象学、もしくはポストモダン思想、人類学、社会学、美学理論など領域を横断する仕方での大きな影響を与えたと言えるだろう。それはまさしく二十世紀の哲学を彩ったものであるとともに、現代においてもその影響力はいまだ衰えていない。

本稿は、西田の哲学をパースペクティヴィズムとして読み解きたい。だが、よく言及される後期のものではなく（Odin 1996）、あえて前期の著作にそれを見出だしたい <sup>(2)</sup>。その著作とは、1920 年の『意識の問題』である。

この著作は、これまでの研究ではほとんど注目されてこなかった。その理由は、西田が自身のなかで新たな立場を提示する『自覚における直観と反省』

（1917）と『働くものから見るものへ』（1927）のあいだに属する過渡期の著作であることに由来するだろう。とはいえ重要な著作である。『働くものから見るものへ』の執筆時期に書かれた草稿や講義ノートを見れば理解されるように、『働くものから見るものへ』では明示化されていない多くの議論が『意識の問題』の内容を引き継いだものであるとともに、それが『働くものから見るものへ』の暗黙の前提を形作っているためだ。筆者の考えでは、おそらくこの著作の読解を通じることで以降の西田の議論を、別の角度から捉え直すことができるだろう。本稿は、とりわけその『意識の問題』のなかでも、パースペクティヴィズムに類する発想を重視し考察を進めていく。またそのための方法として「衝動」概念に着目する。西田の初の著作『善の研究』（1911）以来、「衝動」概念は、知性と感性の対立の乗り越えという西田が直面した課題のなかで練り上げられたものであり、『意識の問題』では、その議論とともにパースペクティブが吟味されていくためである。本稿の

最終的な目的は、前期西田を独特の理論的特徴を持つパースペクティヴィズムとして提示することにある。本稿はそれを述語的パースペクティヴィズムという名で提示することになるだろう。

これが〈共生〉という論脈と関わると筆者が考える理由は、西田がいわば西田以降の〈日本の哲学〉—西田や彼の教え子のみでなく、彼が影響を与えた仏教思想—にひとつの議論モデルを与えたことにある。つまり、西田の哲学を批判的に分析し、その新たな可能性を模索することは、単なる西田研究の文脈に留まるものではなく、「日本思想」というフィールドにおいて「共生」という事柄を思考していく場合にも貢献可能であると考えられるためである。

それでは議論の順序を確認していこう。

まずパースペクティヴィズムという文脈でよく言及される後期西田のパースペクティヴィズムにどのような改善点が見受けられるかを問題とする。次にそれを手引きとして前期著作『意識の問題』の議論を吟味していく。この著作でパースペクティヴがどのように捉えられているかを確認した後、衝動とパースペクティヴの連関からどのように行為が産出されるか、という議論の吟味を経て、西田のパースペクティヴィズムを明確化したい。

## 2. 西田の後期パースペクティヴィズムの持つ問題点

後期西田をパースペクティヴィズムとして考えるとき、ライブニッツのモナドロジーの影響をそこに見て取ることができる。

モナドは世界を映す生きた鏡と考えられる。一つの都市が種々の方角から種々に映される如く、各々のモナドは一つの世界を種々なる観点から映すのである。かくして各々のモナドはまた一つの世界と考えられる。(9-71)

後期西田の主要論文「絶対矛盾的自己同一」の直前の「歴史的世界における個物の立場」では、上記のようにライブニッツが個体のパースペクティヴについて述べたまさにその箇所が言及され、そこから多数の個がそれぞれ独自の世界を持つものとして断絶を含みつつ、相互的な行為の連関のなかで世界が形作られていく、という立場—西田の術語での「一即多、多即一」で

ある「絶対矛盾的自己同一」一が紡ぎ出される。

さて、この後期西田のライブニッツ主義に対して批判を投げかけたものに、柄谷行人の『ヒューモアとしての唯物論』に収録された「ライブニッツ症候群」という論文がある（柄谷 1993）。筆者の立場からすると柄谷の西田への批判のなかにいくつか疑問を感じる箇所もあるが<sup>(3)</sup>、重要な指摘を行っていることは見過ごせない。それは後期西田の「現実中心主義」つまり、あらゆる個物が「唯一の現実」—また、これは西田の術語での「歴史的世界」に対応する—という収斂先、絶対的な相関項を持っていることへの批判である。そして、これが第二次世界大戦時の西田の歴史理解と重なっている当のものであることがこの論文では指摘されている。

これを踏まえながら本稿はある程度、西田を擁護するところから始めたい。日記や書簡のなかには、西田の戦争に対する強い嫌悪と当時の軍部への反発が書き記されているし<sup>(4)</sup>、また当時の日本軍への批判（それは当時では命がけの行為であった）も少なくとも本人の意図としては行っていたことは理解しておくべきだろう<sup>(5)</sup>。とはいえ同時に、それと並行するような仕方で、いくつかの内在的な欠落点を西田の後期哲学に見出だすことができるのではないか。むしろ必要とされていることは、西田の後期哲学の内在的な批判なのではないか。本稿はこのような立場を取りたい。そして、その欠落点を代表するものとして、「唯一の現実」という絶対的な相関項を批判していきたい。

なぜなら後期西田において、あらゆる個物の持つ世界が「唯一の現実」に収斂するという考えは、ある選別の原理を持ち合わせるためだ。それは西田の次の文言に見られるだろう。「苦を恐れ樂を願う欲求的自己と言うものは、真の自己ではない。生物学的である」（11-427）。人間のみが、行為のなかで「唯一の現実」の自己形成作用を観取できるが、それは自らの衝動や欲求の「自己否定」によって到達される。「自己否定」によって「唯一の現実」のなかで自分の為すべきこと—西田の術語での「当為」—を観取できない人間、もしくは欲求や私利私欲のままに「唯一の現実」への通路を持とうとしない人間は動物に等しいと西田は述べる。彼によれば、人間が創造的であるためには「自己否定」は生の限り繰り返されるべきである。

「唯一の現実」という前提に加え、ここには三重の落とし穴が潜んでいる。まず、西田自身のグループが「唯一の現実」を把握できているという暗黙の

内の理論的前提。どの観点に立てば西田はそのような理論を提示できるのか、という問題である。いいかえれば、「私たちの立場は絶対的に正しい」という根拠を欠いた独断がそこに潜んでいる。くわえて、「唯一の現実」との関係が直観的とされていること<sup>(6)</sup>。そこには狂信への批判可能性が欠けているとともに、「当為」を観取しているはずが、自己否定の行き先が何らかの暴力や偽りのカリスマとすり替わってしまう可能性が考慮されていない。さらに、自らの動物性の否定による危うさ、自らの動物性の否定した上で、暴力的に他者へそれを投影する可能性が考慮されていない<sup>(9)</sup>。私たちは、どのように自らの衝動に配慮し、それと共生すべきなのか。後期西田の哲学では、それを努力によって抑え込む、という仕方でのみ考察されており、そこに含まれている問題点が意識されないままになっている。

論点を平易に言い直せば、西田の後期哲学では、個が個独立のものと捉えられるのではなく、「唯一の現実」である「歴史」に従属した限りでの個として捉えられてしまっている。「個」は歴史に参加する限りでのみ、個と見なされ得る。だが、そのように考える場合、たとえば歴史からは失われてしまった、歴史の表舞台に現れることのない個を考察するための原理が前期・中期のものと比べた場合に欠けてしまったように筆者には思われる。そして、この水準の個にこそ、私たちが分析すべき水準はあるように思われるのである。

結局、今の筆者の見立てでは、西田の哲学の発展を模索するならば、〈唯一の現実〉という前提を破棄し、「一即多、多即一」と示される絶対矛盾的自己同一を解体し、その思考法を書き換えなくてはならないように思える。

本稿は、そのようなパースペクティヴィズムを前期の西田のテキストのなかに求めたい。それはあらかじめ述べるならば、唯一の現実に収斂することのない、多世界論に拘泥するパースペクティヴィズムとなるだろう。

### 3. 『意識の問題』 一場としての意識とパースペクティヴ

それでは西田の前期著作『意識の問題』の吟味に移っていこう。

まず、この著作においては、これに先立つ作品での主張が前提となってい

るため、それらを簡潔に確認していこう。前提となる主張とは、(1) 経験が主観と客観の対立に先立つこと（『善の研究』（1911）での「純粹経験」）、(2) その経験は、対象を定立するとともに、その対象を再帰的に把握する運動性を持つこと。経験による対象の構成（「直観」）と「反省」の二つの契機の同居がそれにあたる（『自覚』（1917）の概念「自覚」）。この二点である。

『意識の問題』ではこの二つの主張を礎としながら、認識的な諸概念（感覚や感情、意志など）の再吟味が行われていく。その意味で、この著作は先立つ作品の延長線上にある。

そして、この著作には他の著作の主要な議論の萌芽がすでに現れている。とりわけ重要と思われること、それは新たにこの著作のなかで西田の中期哲学の開始を告げる著作『働くものから見るものへ』での認識論的な刷新を先導する概念「場所」に繋がる議論系列が提示されることである。また、後ほど確認するが「場所」が提示される時期には顕在的に論じられない「場所」との連関を持つ諸概念が提示されることから、この著作は単なる過渡期に収まり切らない重要性を持つと言えるだろう。

議論の準備として、簡潔に概念「場所」の定義を確認しておこう。西田は『働くものから見るものへ』の論文「場所」のなかで、こう述べている。

有るものは何かに於いてなければならぬ、しからざれば有るということと無いということの区別ができないのである。論理的には関係の項と関係自身を区別することができ、関係を統一するものと関係が於いてあるものとを区別することもできるはずである。[.....] この如きイデヤを受け取るものとも言うべきものを、プラトンのティマイオスの語に倣うて場所と名付けて置く。無論プラトンの空間とか、受け取る場所とかいうものと、私の場所が同じいと考えてるのではない。(4-208)

「場所」とは、関係の項でなく、また関係自身、もしくは関係を統一するもの（実体が想定されているだろう）とは異なる「関係が於いてあるもの」である。そして西田はここから次のように主張する。「[……] 力の本体として物が力を持つと考えることもできれば、力を空間に属せしめて物理的空間というものを考えることもできるのである。私は知るということを意識の空間に属せしめて考えてみたいと思う」（4-214, 215）。すなわち、「場所」

概念とともに西田は意識を空間—あるいは単なる作用を受け取る「場所」—と提示し、議論を進めていく。この「意識の空間」という発想は、論文「場所」で論じられる階層構造は持たないものの、これに先立つ『意識の問題』のなかにも見受けることができる。

さて本稿で私たちが特に注目したい論点は、上記の場所の定義のなかにパースペクティブの問題が折り込まれていることである。すなわち、「有るということと無いということの区別」に先立つ「於いて」がそれにあたる。

「場所」とはパースペクティブである。「何かに於いて」というパースペクティブ—たとえば、色に於いて、香りに於いて、固さに於いて、などの観点にもとにおいてのみ、私たちは物を認識する。西田によれば、つねに対象の認識にパースペクティブが先立つ。その意味で、つねに私たちの認識は限定されたものである。

西田において、パースペクティブとは空間的なものである。カントの『純粋理性批判』の「反省概念の二義性」のなかの空間に関する議論を援用すれば、まさしくそれは「確かに何かあるものであるが [……]、それ自身は決して直観される対象ではない」<sup>(7)</sup>。「場所」は、徹底的に現出することを拒む。それは有無の区別に先立つが故に、私たちはそれを有とも無とも表象できない。それは背景につねに留まる。いわば、それはつねに対象化を逃れ去る非現出体である。

このような「場所」のパースペクティブ性—あるいは於いて性—は、『意識の問題』のなかですでに次のように提示されている。

出来事とは何物かの上に於いての出来事である、何物かがその基礎とならねばならぬ。現象の背後にいわゆる実体の如きものを考える必要はないにしても、これらの現象が何らかの意味において独立し、それ自身の法則を有するならば、出来事の単なる連続以上のものでなければならぬ。(3-8)

このように、ここですでに実体とは異なる「於いて」が、認識の基礎となることが言明されている。くわえて西田の議論をパースペクティヴィズムとして捉えた場合に現れる特徴は、パースペクティブが認識の一人称性を表すのではなく、認識に一般性を付与する審級に置かれる点にあるだろう。

我々が物の性質を比較して類似とか同等とかいうには、その根底に一般概念が



なければならぬ。一般概念とは一般的性質である。判断の根底となる一般概念、すなわち一般的性質はそれ自身に同一なるもの、それ自身に不変的なものである。なければならぬ。(3-93)

西田は一般性もしくは本質を、実体あるいは対象として捉えるのではなく、“於いて”という空間性を帯びたパースペクティブとして捉える。『意識の問題』では予示されているのみだが、出来事とパースペクティブの関係性は、「分有」<sup>(8)</sup>、あるいは「場所」の側からは「包摂」である(4-226)。『意識の問題』の議論に前提とされていた〈経験は対象を定立するとともに、その対象を再帰的に把握する運動性を持つ〉という立場(=「自覚」)に準えて言うならば、対象の定立に先立ってひとつのパースペクティブの確定と、その確定されたパースペクティブに“於いて”再帰的な把握つまり反省が行われるのである。このように、パースペクティブの於いて性は、それ自身は対象として現れない場でありながら認識の一般性を担保する。その意味で〈私〉の認識とは、空間であるパースペクティブへの〈踏入〉であり<sup>(9)</sup>、そのパースペクティブによって、〈私〉の認識は私秘的なものでなく、つねに公共性へと開かれている。

とはいえ、いまほどパースペクティブはつねに公共性に開かれていると述べたが、それはどのようなことか。これについて西田は別の著作で次のように言及している。

もちろん異なれる人と人の間に感覚の異同を直接に比較することはできぬ、時にはある人が赤と感ずるものを、他の人が青と感じることがないとも言えない。しかし感覚的性質が単にそれだけの意味のものであるならば、客観的実在としての物理的世界は成立しない。[.....]すべての人に同一の物理的原因から同一の感覚を生ずるという感覚自身の客観的連続性が認められて、はじめて物理的世界が立せられるのである。(4-14)

西田幾多郎は『善の研究』での「純粹経験」の概念とともに独我論を克服した、とする見解がおそらく一般的であるだろう。我々は共通の「経験」に於いてあるのだ、と。だが、ここに現れているのは別の思考の力線の示す西田である。この一文での西田はこう述べる。「ある人が赤と感ずるものを、他の人が青と感じることがないとも言えない」。私たちの、あるいはそれ

ぞれの個の持つ経験が、たとえそれが主観と客観の対立に先立つものであるにせよ、全く同一のものとは断定し得ない。つまり、「純粹経験」の織り地として、〈唯一の現実〉を選択する必然性はないと述べられているのである。それは、いわば純粹経験の多数化、「意識の空間」の多数化にあたるだろう。

出来事の把握のなかで現れる任意のパースペクティヴをもとに認識は為される。さらに、そこにある削除が行われる。それは、感覚の持つ私秘性の削除である。つまり、あるパースペクティヴが、他の個にも当てはまる「客観的連続性」において把握され、抽象が行われた場合に、はじめて、その客観的連続性を地とした「物理的世界」—ここでは〈唯一の現実〉を含意する—が成立するのである。ここに通例的なパースペクティヴィズムとの交点を見出だすことができる。つまり認識とは、後ほど隠蔽されるにせよ、感覚の私秘性という一人称性を起点とする。その意味で、個体の持つパースペクティヴを通じてのみ真理の把握が可能である<sup>(10)</sup>。

この感覚の私秘性を前にした躊躇こそ、後期の西田が喪失してしまった当のものである。そして、これを私たちはこのように読み替えることができるのではないか。我々はそもそも一度として同じ世界に住んだことはないのである、と。〈私〉と〈机〉、机上にある〈空き缶〉、近くに寝そべる〈犬〉、それぞれの個体は同じ世界には存在しないのである。つまり、個物の関係の収斂先として〈唯一の現実〉を選択するのではなく、パースペクティヴとパースペクティヴの客観性の承認のなかで、はじめて〈現実〉が成立すると考える立場がそれである。個物は「唯一の現実」あるいは歴史の相関項であるのではなく、それに先立つ。もしくは個物の数だけ現実がある。その意味において、「純粹経験」は「一」ではなく、個物の数だけ存在する。また同様にそれは、私の経験の底と、他者の経験の底が同一である、と断定できない経験である。つまり、「無」はもはやあらゆる個物の唯一の底であるとは見なし得ないのである<sup>(11)</sup>。つまり、一即多、多即一ではなく多即多の相対矛盾的自己同一として、本稿は前期の西田のパースペクティヴィズムを提示したい。これは先述の柄谷による西田の「ライブニッツ主義」への批判に正面から応えるものではないだろうが。筆者が目指したいものは、西田による多数性の議論を「一」という留め金を外し、よりラディカル化することである。そして、そのラディカル化のなかで、柄谷の指摘した陥穽を回避するこ

とにある。

#### 4. 衝動とパースペクティブ

これまで私たちは西田の前期哲学をパースペクティヴィズムとして提示してきた。次に、その内実を「衝動」概念の分析を通じて確認していきたい。

「衝動」あるいは「欲求」「欲望」に対して、西田の著作からアンビバレントな二つの傾向を取り出すことができる。まず一方が本稿のはじめにも確認した、反欲求主義あるいは禁欲主義とも言える立場である。そして、この立場において、行為の真偽、善悪を判断する次元が個の直観にのみ委ねられてしまっていること—つまり批判のための原理が欠けていること)、そして不必要な選別の原理が介入してしまっていること—自己の物質性・動物性の断固とした自己否定の要求—の二点を問題点として提示した。このような禁欲主義的な西田の背後には、同時に衝動や欲求、あるいは欲望を抜きにして人間的生は成立し得ないという別の顔が貼り付いている。この別の顔を本稿はより際立たせていきたい（そして念のために言えば、それは非合理性あるいはカオスの礼賛ではない）。

さて、『意識の問題』における「衝動」概念の内実を見ていこう。それはこのように述べられている。

精神現象においてはこれ〔物理現象〕に反し関係が実在的である、意味が実在的であるということではなかならぬ。きわめて最初の意識といえども衝動的であるというのはこれがためである。衝動的というのは意味が実在的であることを意味するのである。我々は普通の衝動を盲目的と考えているが、衝動が衝動として感ぜられるのは、そのなかに意味すなわち全体への関係を含むが故である。画家の眼にはすべての色は *eine Tendenz nach Weiss und Schwarz* を含むというように、赤の感覚は、自ら非赤への推移を含むのである。(3-86)

この一文が重要であると筆者が思う理由は、ここに西田の知性と感性の二分法への独特の距離の取り方が現れていると考えられるためである。「衝動」は、物理現象あるいは「力」と異なる。それは、その内部において「意味」が実在するためである。この「意味」はどのようなものだろうか。ここに先

立つ著作『自覚における直観と反省』との断絶が現れている。つまり『自覚』のなかでは「意味」とは、リッカートら新カント派の議論を受容しながら命題の持つ汎時間的性質と論究されていた。だが「意味」をそのように取った場合、上記の引用は整合的に解釈できなくなるだろう。

つまり西田は衝動に内在する「意味」、あるいは言ってしまうえば非概念的な意味、情動において現れる汎時間性をこの著作のなかで模索している<sup>(12)</sup>。だが非概念的な意味とは何か。

上記の引用のなかで「意味」が「全体への関係」として論じられていることに眼を向けよう。くわえて、それは「色」における「白と黒への傾向」として述べられる。具体的な赤の感覚は孤立した出来事ではなく、そのなかに変化可能性を含み込んでいる。具体的な赤は次の瞬間に青や緑、橙など全く別様に変化してしまう可能性を持つが故に具体的なのである。本稿の立場から見ると、こう言い直せるだろう。具体的な感覚とは変化可能性に“於いて”あるものである。すなわち、パースペクティブである“於いて”とは変容可能性そのものである。そして、これがさきほど確認した「客観的連続性」を可能とするものであると考えることができる。「衝動」に内在する「意味」とは、変容可能性であるパースペクティブである。

この議論を、本稿は中期西田の次の議論と接続してみたい。それは 1930 年に「場所」概念の拡張のなかで提示される西田の次のようなテーゼである。

主語となって述語とならないものに反し、主語となって述語とならない超越的述語面ともいうべきものが我々の意識面と考えられるものである (5-13)

つまり本稿は、変容可能性に関する議論を西田が「述語的論理主義」と名指す立場、「場所」を「述語面」として提示する立場へと接続したい。たとえば、こういう例はどうだろうか。

「加藤」という名前の人物が歩いている、と〈私〉が判断する。そのときに私は「加藤が歩く」と認識するのであるが、西田によれば、〈歩く〉というパースペクティブに於いて、が論理的に先行する仕方では加藤が認識されるのである。この〈歩く〉という述語面—私たちが〈歩く〉という客観的連続性を持つ動詞として切り出す元となる非現出的な場所—とは〈歩く〉という観点の持つ変容可能性である。加藤の歩きは、千鳥足の〈歩く〉、がに股の〈歩く〉やカタツムリの〈歩く〉、ゾンビの〈歩く〉という諸々の変容体、

変容のグラデーションに“於いて”、揺動的なものとして包摂される。ここでパースペクティヴの持つ重要な特性は、それが人間と非人間、そして狭義の現実と空想という区分を越境していることである。これは準-汎時間的なものと言えるだろう。つまり、ゾンビという存在の発明によって〈歩く〉の変容可能性が拡張されたように、個物と個物の関係のなかで、述語面は拡張されていく。だが、それは事実的に現れる場合には、つまり認識を導く非現出的なパースペクティヴとして現れる場合には、あたかも汎時間的なもの、時間を持たないものとして現れる。この準-汎時間性から、西田は変容可能性を衝動に内在する「意味」として捉えたと考えられるだろう。

くわえて重要であるものは「衝動」のなかで現れるパースペクティヴはひとつではない、という議論である<sup>(13)</sup>。具体的な感覚である「衝動」において、複数のパースペクティヴが共立的に現れる。「加藤が歩く」という判断の〈歩く〉は、〈走る〉や〈止まる〉、〈眠る〉といった諸々のパースペクティヴとの競合のなかで現れる（西田はそれを「意味の共存的关系」と呼ぶ）

(3-31)。そして、あるひとつのパースペクティヴの確定とは、別のパースペクティヴの抑制を意味する。ある対象が〈歩いている〉ならば、それは〈眠っていない〉、〈走っていない〉というように。準-汎時間的な変容可能性は、狭義の現実と空想の区別を越えたかたちで、ひとつの出来事の把握のなかに共立するのである。

この議論は、「自己」に関する西田独特の立場へと結び付く。それは次の一文から理解できるだろう。

我々が真に物を知るにはこれと *mitfühlen* しなければならぬ。[……] 色を種々なる *Dimensionen* への連続として見る芸術家は色と共感するのである。[……] 我々が過去の事柄を知るには現在の我は過去の我と結合せねばならぬ、すなわち過去の作用と結合せねばならぬ。(3-68)

ここで西田は認識のプロセスの開始を「共感」(*mitfühlen*)として示す。それは〈色を種々なる次元〉への連続として見ること、あるいは別の箇所の表現を用いれば「強度的に見ること」を表す (3-45)<sup>(14)</sup>。言い換えれば、色の感覚は「色」というひとつのパースペクティヴのなかに収まるものではなく、そのパースペクティヴを越境し別のパースペクティヴとの関係を打ち立てていく。西田はそのようにして打ち立てられたパースペクティヴ間の関係

性を「感情」と呼ぶ (3-45)。その越境の動きを西田は認識の起始としての「共感」という言葉で示している<sup>(15)</sup>。

ここで重要であるのは、西田はそれを自己同一性の議論とも結びつけていることである。まず、原的には現在の自己のみが存在する。あるいはこれを瞬間的なものとして捉えてもよいだろう。だが「物を知る」という認識の運動性のなかで、意識の空間に存立する諸パースペクティブ間の関係が打ち立てられていく。いわば、それは諸パースペクティブを横断する新たな場の形成であり、そして、その場に“於いて”過去および未来の諸々の出来事は連結されるのである<sup>(16)</sup>。その結合こそが「自我」となる。

つまり、西田は三種類の自己を提示する。それは、対象化しえない意識の空間である「自己」。そして、今確認した過去の出来事と現在の出来事の結合を導くパースペクティブ間の関係性である〈感情の帯〉としての「自我」。最後に、主語として指標することのできる対象としての〈私〉。

三つの自己はそれぞれの特性を持つ。「自己」とは、パースペクティブを保存する無時間的な空間である。それは、空間がどこから始まり、どこで終わるのかを私たちが明言できないように、明確な果てを持たない。換言すれば、それは底を持たない。他方で「自我」とは、現在に感じられる過去から未来への広がりを持する場としての感情である。それは、いわば無底の上の一時的な仮の底であるとともに、パースペクティブ間の関係によって、断続的に変化していく。いわば、それは「幅をもった現在」もしくは「見かけの現在」(*specious present*)となる。最後に〈私〉とは、抽象化のなかで現れるフィクショナルな固定点である。西田はそれを経験から遊離していると提示するだろう。つまり、「衝動」の越境を通じて、底のない「自己」のなかに、一時的な底としての「自我」が形成される。そして「自我」の抽象化から、対象的な〈私〉が導出されるのである。(また中期には、この三つの自我は「自己は自己に於いて自己を映す」、つまり空間的な「自己」が、“於いて”という結合の場となる「自我」を形成し、その自我に於いて、対象としての〈私〉の抽象化がなされる、と表現される当のものであるだろう)。

これまで私たちは、パースペクティブに関する理解を深めるために、「衝動」概念を吟味していった。そこで私たちが確認した論点とは、衝動とは意味が内在する感覚であること。そして、その意味とは、変容可能性としてのパースペクティブであり、それは「述語面」であること、そしてひとつの出

来事の認識のなかに複数のパースペクティブが現れること、それらのパースペクティブに関係が打ち立てられることが「感情」であり、これが主語とはなりえない、状態としての「自我」であること。これらのものであった。

それでは、最後に共感から始まる認識のプロセス、あるいは「自己」・「自我」・〈私〉という転化のなかに、パースペクティブと「衝動」概念がどのようにに関連しているかを確認したい。

## 5. 行為と可能世界、およびパースペクティブ

これまで私たちは前期西田のなかに〈唯一の現実〉に収斂することのないパースペクティブイズムを求め、考察を続けてきた。そこで私たちが行き当たったのは、全体化を逃れる部分としての感覚の私秘性である。そこでは個物と個物が共通の底を持つ、という断定は不要である。もしくは、自己と他者の住む世界が同一であるとは言い得ない。

もちろん実質的には、議論を行うためには感覚の私秘性の削除が要請されるだろう。そのため私たちはそれぞれの個が共通の底を持つことを、ある程度暗黙のうちの前提としなくてはならない。だが、それを事実的なものと見なすか、それとも一個の到達不可な理念として見なすか、といった差異がもたらすものは大きいだろう。なぜなら、この立場においては、〈私〉と〈他者〉の住まう世界が別個のものという前提のもとに存在するとみなされるため、〈私が絶対に正しい〉という前提の内部に存在する〈あらゆる存在者の活動は唯一の理論的地盤に包摂できる〉という態度は、つねに疑わしいものとして見なされるためだ。いわば、個物の数だけ意識の空間が存在する。

そして、そのような多である「意識の空間」において「自己」は「自我」へ、「自我」は対象としての〈私〉へ、という個体化の作用が引き起こされると前期の西田は述べる。そして、それは行為の遂行のプロセスと並行して論じられるものである。つまり、行為のなかで対象的な〈私〉は成立する<sup>(17)</sup>。次に、私たちはそのような行為における〈私〉の成立がどのように論じられているかを確認していこう。

まず出発点となるものは、すでに確認した「衝動」である。そして、そのプロセスが述べられたものが〈強度的に見ること〉である「共感」であった。

ある出来事に対して、複数のパースペクティブがそれを包摂しようと現れる。あるひとつのパースペクティブが主導的なものとして選択されるのだが、選択されなかったパースペクティブ間に関係性を打ち立てる運動性（西田はそれをカントの「反省的判断力」のように作用すると説明する）、あるいは衝動によるパースペクティブの越境、感情の創設、それが「共感」となる。この状態での〈意識の空間〉である「自己」の運動性を西田は次のように記述する。

「……」我々の認識対象界は味自体とか色自体とか言う如きものにあたりこの世界が具体的全体すなわち他と無限なる関係に置かれた時、あたかも味が渴の対象となり、色が視覚の対象となる如く、行為の対象となるのである。この時  
「……」現実の世界は無限に可能なる世界の一として、単に欲求せられた世界、意志実現の過程となる。自我は一つの世界と他の無限なる世界との関係、すなわち具体的全体との関係を示すものである。(3-169)

まず、認識の対象となる世界は、〈味自体〉や〈色自体〉のような一つの“於いて”、あるいは一つのパースペクティブとともに成立する。だが、それに引き続いて感情の組織化つまり、衝動によるパースペクティブ間の関係性の打ち立て一が現れる。その状態を西田は「現実の世界」が「無限に可能なる世界の一」と諸可能的世界を背景に持つものとして提示する。さらにそれは「単に欲求せられた世界」、つまり「欲求」と連関する。

まず、この引用でパースペクティブが「可能的世界」と述べられていることに注意を払おう。たとえば、〈食べる〉というパースペクティブとともに眺められた世界は、〈歩く〉というパースペクティブとは異なる。〈歩く〉ための助けとなる杖は、〈食べる〉という相においては全くの無用の長物である。それ自体は対象として現れないパースペクティブは、それ特有の存在者の分節の方法を持つ。それ故に西田はそれを「世界」と呼ぶと考えられるだろう。その意味で後期の〈歴史的世界〉も、無数にあるなかの一つのパースペクティブに過ぎないのである。

そして「欲求」は、現在の“於いて”と、無数の他の“於いて”（あるいは「可能的世界」）との間に関係が成立した状態であると考えられる。ここで興味深いことは西田がそれを「行為の対象の成立」であり「欲求」の成立と提示していることだ。ひとつのパースペクティブのもとに於いて眺められた出



来事が、さらに無数の可能的な分枝の集合に“於いて”、見られた揺動的状態が「欲求」である。

それが、認識の項となる「行為的对象」の成立となる。すなわち、ある出来事が、あらゆるパースペクティヴに共通するとともに、さらにあらゆるパースペクティヴを用いても、完全に包摂することが不可能であると見なされることで—あるいは、いかなる述語を用いても記述し尽くすことのできない超越性が対象に属すると見なされることで、それは「自己」から独立した個体へと転じる（3-229）。いわば、それは「他」の成立であり、西田はそれによって自己の内と外の切り分けが生じると述べる。

このプロセスが「共感」であることを思い起こそう。そして、その共感に関する文章のなかで、西田はそれを「自我」の誕生と並行して論じていたことを思い起こそう。共感によって「我々が過去の事柄を知るには現在の我は過去の我と結合せねばならぬ」。つまり、行為の対象の成立とともに、過去の自我との結合を可能とする場が開示される。くわえて、西田はそのような過去との結合が、複数存在するパースペクティヴのひとつを、ありうべき「目的」として、現在の状況に対立する仕方設定することから遡及的に形成されると述べる。つまり、ここで「未来」という方向性が生じるのである。

これこそが底のない「自己」とは異なる、現在の認識を軸として組み立てられた場としての「自我」となる。その自我とはいまだ対象ではない。それは、過去と未来へと伸張した幅をもった〈現在〉であり、その内容は場としての「感情」である。それはどこを指しても存在するものとして示すことができない。その意味で西田にとって「自我」とは、コギトではなく、超越論的な〈私は思う〉でもない場所、あるいは非現出体である。

この文脈とともに、西田は「自我」を別の位相からも提示している。

我々の自我というのはかくの如く認識対象の世界と世界との連鎖であって、自我の実現というのはこの如き対象界の推移において現ぜられるのである。（3-169）

「自我」とは固定的なものではなく、パースペクティヴの流動として捉えられる。その意味で、それは実体ではなく、流れる場所である。過去の記憶との結合を導く状態としての自我を〈幅をもった現在〉と考えることができるとともに、「自我」のパースペクティヴの流動によって時間の推移が導か

れる。西田は「欲求」の成立を「意志実現の過程」の端緒と述べていたが、それは目的の成立—つまり「未来」という方向性の成立—に基づく。そして、「自我」にとって望ましい未来に向けてパースペクティブは流動していく。その運動性が「欲求」である。

西田にとって「自己」とは主語となり得ないものである。とはいえ、それは虚無ではなく対象化を逃れる空間であり、場である。だが同時に、私たちは日常において、自らを一個の〈私〉として把握する。この〈私〉という指標はどのように成立するのか。次にこれを見よう。

〈意識の空間〉である「自己」にはさまざまなパースペクティブが共立する。そして、各々のパースペクティブは、各々の変容可能性を持ち合わせている。「目的」という仕方で未来という方向性が形成されたとき、それぞれのパースペクティブがそれぞれ別個のプロセスのもとに「未来」という方向性に対して作動すると考えられる<sup>(18)</sup>。

西田によれば、統一的な主語としての自己はあらかじめ存在しない。それぞれのパースペクティブの持つ、それぞれにとって相互に外在的である離散的なプロセスが存在する (3-15)<sup>(19)</sup>。だが、私たちは意識内に存在する相互にバラバラのプロセスを総称して〈私〉と呼ぶ。ここには相互に外在的であるプロセスが何らかの仕方で統一されている必要があるが、西田はそれを「規範」の定立として提示する。

我々が互いに偶然的と思われる作用を統一して「私の意識」と考えるのは意志作用の内面的統一によるのである。[……] 偶然的なるものの必然的統一とは矛盾ではなかろうかという疑問も起こるであろうが、意志的統一の必然は道徳的当為の必然である。(3-16)

「意志」、それはそれに先立つ根拠を全く欠いた状態で、意識内の諸プロセスを統一する「規範」を定立する能力である。その「規範」によって、一個の主語的な〈私〉あるいは〈自分〉は成立する。ここで西田の述べる「規範」(上記の文章の「道徳的当為の必然」)が必ずしも道徳的・倫理的である必要はないことに注意しよう。たとえば、「何よりも金が大事である」という規範は、一個の〈私〉を成立させる立派な規範である。

ここから次のことが帰結する。西田はこう主張する。あらゆる人間は、それぞれがそれぞれの仕方で非合理である。つまり、全く根拠なく、金であれ、

魂であれ、来世の生であれ、何らかのものを必然的に「非合理に」信じている。科学的法則も、私たちが世界のすべてを一望できない以上、認識領域からの逸脱を含む。科学的法則が非合理だ、とは言えないだろうが、それも信念としては非合理的なものとして存する。規範の定立は蓋然性と、一種の賭けを含む。そのことで〈私〉は一個の〈私〉として成立するのである。

ここにおいて〈唯一の現実〉という概念を破棄することができる。〈唯一の現実〉は、つねに事後的に現れる。だが実のところ、私たちは本当にそれぞれが共通の世界に住んでいるのかを知ることができない。同様の信念を持つ場合でも（たとえば〈魂は存在する〉）、その内実は全く別様である。

そして西田によれば、規範とともに、「欲求」は別のものに变化する。それは「欲望」である（3-165）。その場合のポイントは、パースペクティヴと行為の対象を調停する媒介者の位置に規範が置かれる点である。いわば、外界の原理によって調停された欲求が「欲望」となる。

あるひとつの欲望がおこった時、我々は単にこれを内面的と考えるのであるが、そのなかにすでに対象への関係が含まれていなければならぬ、客観的对象が内在的であればならぬ、それは内外統一の純粹作用の一旦として成立するのである。（3-165）

西田はこの一文のなかで、西田は「欲望」を客観的对象の内在化として特徴付ける。欲求のなかで成立した「行為の対象」が、無限に到達不可能であるという性質そのままに内面化されたとき、対象への作用のプロセスは権利的には無限に続くものとして定立される<sup>(20)</sup>。やや比喩的な表現となるが、欲望の対象とは、あらゆるパースペクティヴから超越した対象の内面化である以上、欲望のプロセスに終結は存在しない。そして、その対象の内面化は、内外統一の純粹作用—つまり、規範に基づいた傍観—によって可能になるとされている。ここで内在的な客観的对象という論点にブレンターノの志向性の影響が見て取れることに着目しよう。西田はこの文章の直後に「意志において我々は[……]内から外に出でんことを求めるのである」と述べているが、「欲望」の成立とは志向性の成立である（3-165）。欲望はプロセスの権利上の無限化であり、「内から外」という志向性の成立である。

そして衝動から欲求、欲望という変化に続いて「行為」が完遂される。この著作『意識の問題』では、行為は次のように捉えられる。

感情の内容を明らかにするものは表出運動である。[……] 形像を内心化し内心を形像化するものが神話、哲学、特に詩の根源である。(3-65)

行為とは「形」の制作である。後期の議論を先取る仕方で『意識の問題』では「形」が論じられる<sup>(21)</sup>。この形の持つ内容を西田は「他によって翻訳不可能な意味内容」という語で提示する。これはこのように解せるだろう。「形」とは、新たな可能的世界の束、種々のパースペクティヴの固有の折り込み方の創造である。西田はそれをこう表現する。

あたかも彫刻家が大理石からひとつの像を刻み出す如く、無限なる全体の上に新たな実在のレリーフを作るのである。(3-230)

「形」とは、自己によって制作されるものでありながら、自己を離れたものとして現れる。もっとも手近な形として身体的動作を考えることができるだろう。〈私〉の表情や仕草、発する音声は、つねに他者によって私の意図したように捉えられる訳ではない。とはいえ、その表情や仕草の一々には、複数の“於いて”が、そして独自の「規範」が刻印されている。だが、それは自分の意図とは異なった仕方であつて、つまり他の個物の“於いて”と規範の元に—他の個物に「共感」によって伝播する。個物と個物の関係性は〈唯一の現実〉に収斂するのではなく、離散した複数の〈形〉とともに転化していく。形を通じて衝動は伝播し、その衝動は別の個体に宿り、「欲求」から「欲望」へと姿を変え、新たな形を生み出すのである。

ここにおいて、私たちは西田の前期哲学をパースペクティヴィズムと提示する端緒を得ただろう。それは「一即多、多即一」ではない。それぞれの個物が全く別様のことを信じ、全く別様の世界に住まい、「形」を通じてそれぞれの個物は網状に変化していく。「形」という「実在のレリーフ」を背景として、「衝動」のもとにそれぞれの個物が関係する「多即多」の多世界論、それを前期西田のパースペクティヴィズム、述語的パースペクティヴィズムと本稿は提示したい。

## 6. 結論

本稿は、西田幾多郎の『意識の問題』をパースペクティヴィズムとして読み解いてきた。「唯一の現実」を相関項として持つ後期西田のパースペクティヴィズムと異なり、前期のものは絶対的な相関項をもたない相対的な水準に留まるものである。

そして、そのようなパースペクティブの内実を私たちは「衝動」に内在する「意味」として確認した。それは、変容可能性である「述語面」であり、そこから感覚の私秘性が消去されることによって、一般性の水準が成立する。次に西田に特有の自己論を考察した。明確な底をもたない「意識の空間」において、パースペクティブ間に関係性が打ち立てられることによって感情の場である「自我」が生じるとともに、過去・未来という方向性が産出され、また内と外という対立が生じる。そして、次に内と外という対立を調停し、行為を安定的な水準へともたらすものとして「規範」の存在があり、規範の存在とともに欲求は欲望へと転化される。これが志向性の成立であった。

そして、最終的な行為そのものを、新たなパースペクティブの束の形成としての「形」の生産として本稿は考察した。それは、「衝動」のもとにそれぞれの個物が関係する唯一の底が存在しない「多即多」の多世界論である。

本稿の独自性は次の点にあるだろう。すなわち、これまでの研究から見られるような前期から後期への直線的な発展として、西田の哲学全体を見渡すのではなく、後期に対する前期の優れた点を示したこと。そして、それは筆者の見立てでは、後期に適用することでさらに新たな理論的展開を可能にするものであること。この二点である。

これは冒頭に挙げた柄谷の批判に答えることができているだろうか。おそらく正面から論難をくぐり抜けていることにはならないだろう。つまり、私たちは西田の理論のなかの「唯一の現実」という相関項を取り下げ、そしてその多数性をラディカル化することによって新たな理論的な可能性を見て取ろうとした。

また、柄谷は、現実の個体の内に具体的な現実での関係性を回収してしまうこと、およびそれによって現実的な「責任」を抹消されてしまう点を批判

している。本論の立場は、個物は“於いて”という仕方に関係性をある程度は内に包むが、それが展開されるためには、「形」という他者を必要とする。および、主体は「規範」とともに構成されるが故に、それは自らの規範の相から見た責任をつねに背負う。つまり、「主体化」を哲学的に扱うとき、必ずしも「主体」が無責任である訳ではないのである。収斂する絶対的な規範がまさしく存在しないからこそ、主体化の最中にある主体は責任を負うのである。

さて、このように論じることによって、中期の議論つまり「無」に関する議論を取り消してしまう必要があるように見えるが、筆者の見立てでは、おそらくそうではない。それは「無」を、西田が「これを深いと言えどもどこまでも深い、[……] これを浅いと言えども無基底的にどこまでも浅い」と述べているような表面と底の両義性として捉えることによって可能となるだろう (11-451)。つまり、一元的な底として無を思考するのではなく、無が無であることに拘泥する立場がそれとなるが、それは次の機会に譲りたい<sup>(22)</sup>。

## 注

- (1) 西田の著作からの引用は、『西田幾多郎全集』(岩波書店、1949) から行った。また引用の際は、文末に(巻数-頁数)のかたちで付記する。
- (2) 茅野・大橋(1987)によれば、西田の哲学的区分は五期説、四期説、三期説など諸々のものがあるが、現在主流となっているものは三期説と言えるだろう。どのような三区分にするかは現在でも筆者ごとにやや揺らぎが見受けられるが、本稿は、おそらく標準的と言えると思われる前期を『善の研究』(1911)から『働くものから見るものへ』(1927)の前編まで、中期を『働くものから見るものへ』の後編から『無の自覚的限定』まで、後期をそれ以降の著作として考えている。
- (3) 疑問を感じる箇所とは、柄谷が西田の後期哲学をあらゆる関係を内在化させ、実質的に一者である「無」へと収斂させたことによって、現実の個物の関係性が独立性を失ってしまっている、という批判である。重要な指摘と受け取ることもできるが、それと異なった論点も見出だすことが可能であるだろう。つまり、西田は「[……] 絶対矛盾的自己同一的世界というのは、単に生産的、生成的世界でもない。また私を曲解する人の言うごとき知的直観の世界ではない。どこまでも個の働く世界である」と述べるが、ここに怪しさを見るか、ある程度は額面通り受け取ろうとするか、という立場の違いがあるだろう。この点を鑑みて、本稿は後期の西田の問題点は「無」による個の関係性の独立性の消去ではなく「歴史的世界」としての無の実体化にあると考える。

- (4) たとえば 1935 年の書簡では「美濃部問題なども新聞によれば陸軍が口を出しかかるようなり どうなる事やらと思われれます 万事この調子では国家前途のため憂慮の至りに堪えませぬ」(18-525)、「国体明徴何人も疑うものなし これを名として政権をとらんとするものの愚劣こそ最も憎むべしと存じます」(18-542)、「わが国国家の首脳となる人々の力によって国家の前途が中正を失わざらんことを祈る」(18-5552)などの文言が見られる。また 1936 年の 7 月 8 日の書簡などにはファシズムへの嫌悪が記されている。
- (5) 西田自身の行動として最も批判されるものは、日本陸軍のプロパガンダの草稿として使用された「世界新秩序の原理」であるだろう。西田の草稿が書き直されたものが、東条英機の演説のなかに使用されたとされるが、その東条の演説を聞いて西田は「東条の演説には失望いたしました あれでは私の理念が少しも理解せられていないと思います（無理もないことだが）」と失望を露にしている（19-245）。この「理念」にあたるものとして、「日本精神がどこまでも空間的となる、世界空間的となるということは、いかなることであるか。それは何処までも学問的となることでなければならない、理性的となることでなければならない。[……]そこにはどこまでも自己批評がなければならない」という一文を見出すことができ（14-387）、また「日本は世界において、ただ特殊性・日本的なものの尊重だけではいけない、そこには真の文化はない」という文章に、当時の国家主義者との距離を見出すことができる（14-397）。この文脈を踏まえると「世界新秩序の原理」の草稿のなかの「単なる民族主義は、民族自己主義であり、そこから出て来るものは、自ら侵略主義とか帝国主義とか言うものに陥らざるを得ないであろう」という一文に西田の込めた批判を見て取ることができるだろう。
- (6) たとえば「かかる矛盾的自己同一を私は行為的直観というのである。そこには作用に対して絶対的に否定的なものから作用が惹起せられる、すなわち客観的表現から呼び起こされると言うことがなければならない、絶対否定によって媒介せられると言うことがなければならない。[……] 真の客観的当為とは、我々が制作的身体的に繋がる歴史的生命の世界の客観的表現として我に臨むものでなければならない」（9-26）。ここでは〈唯一の現実〉—無に支えられたあらゆる個物が存在する唯一の場としての「歴史的世界」—が行為のなかで直観的に観取されることが述べられている。
- (7) ここで念頭に置いているものは西田の後期の芸術論である「歴史的形成作用としての芸術創作」である。このテキストは例外的であり、どのように集団的な熱狂から権力が発生するかが分析されている。西田は明示的には述べていないが、西田はおそらく集団的な暴力までを念頭に置き叙述を進めていると本稿の時点では筆者は理解している。
- (8) 「『於いてあるもの』は自己のある場所の性質を分有するものでなければならぬ」（4-227）
- (9) ここで誰が踏み入れるのか？という問題が現れるように思えるが、それは「誰」とは明確に言えない先人称の状態であるものの、後述の感覚の私秘性がそれに当たると考えられる。

- (10) ここで中期西田の「直観」概念をどのように捉えるかが問題となるように思われる。それが唯一の現実の自己形成活動であることを逃れるためには、絶対無の一元性をもってその根拠とすることはできないだろう。では、個物の多数性を維持したまま「絶対無」を思考できるのか。筆者の現在の見立てでは、それは可能である。とはいえ、そのことに関する詳述は別の論文になるだろう。
- (11) ここで中期西田の「直観」概念をどのように捉えるかが問題となるように思われる。それが唯一の現実の自己形成活動であることを逃れるためには、絶対無の一元性をもってその根拠とすることはできないだろう。では、個物の多数性を維持したまま「絶対無」を思考できるのか。筆者の現在の見立てでは、それは可能である。とはいえ、そのことに関する詳述は別の論文になるだろう。
- (12) 「論理の範疇にあてはまった認識対象界を唯一の実在となす時、この体系に入り来らざるものは単に主観的と考えねばなるまい。しかし我々の感情にはおそらくこれ以上の意味がある、知識以上の客観的意味がある」 (3-79)。
- (13) 参照項としてはたとえば、「意志の立場から見て、所謂作用の結合に無限の仕方がある」 (3-24)。
- (14) 紙幅の都合上、この著作での「強度」について十分論述できないが、それは次のように述べられている。「意識現象とは性質即強度である、性質とは経験内容が単にそのものとして静的に考えられたもので、強度とはその動的状態である」 (3-45)。つまり、『意識の問題』で論じられている直接的経験とは、強度的な意識の空間を実質的には意味する。
- (15) 繰り返しになるが、本稿はこの共感が同じ一つの現実においてなされるとは考えていない。
- (16) ここで西田はベルクソンが『物質と記憶』で問題とした記憶の持つパラドックス（あるいは過去のパラドックス）をほぼそのまま受容している。「過去の意識は感覚的に現在でないことは言うまでもないが、過去の経験が何らかの形において現在の意識の中に働きつつあることは事実である。我々の知覚の中には多くの過去の経験が含まれているのである。ただ再認識として独立の意識とはなっておらぬ。想起せられた過去の経験が再認識として独立の意識を成すとき、我々はこれを知覚の意識と異なった対象界を有する別種の意識と考えることができる。記憶の意識というのはいわゆる時間を超越した意識と考えることができる。過去の経験もこの意識に対してまた現在であると考えることができる」 (3-219・強調筆者)。つまり、過去は過去でありながら現在と共存するという過去のパラドックスを西田はここで自らの立場として主張しているのである。より細かく言えば、この議論の淵源は『思索と体験』のなかのベルクソン論に遡ると言えるだろう。
- (17) ここで、他者に暴力を振るった後に我に変えるような忘我の状態を想定されるかもしれないが、当然そうではない。なぜなら後述するように、対象としての〈私〉に先立って状態としての「自我」が認識の原理として働くためである。つまり、対象としての〈私〉が見出だされない状態は、忘我の状態ではない。
- (18) たとえば〈書く〉というパースペクティブにおいては、行為がひとつの相のもとに連関する仕方では定立されていく。だが、それと同時に並行して、たとえば〈食べる〉というパースペクティブにおける行為のプロセス（空腹を満たすと



いう目的にめがけた行為のプロセス)が存在すると考えられる。それらのパースペクティブは相互に全く関係をもたない。西田はそれを「偶然的である」と述べる。

- (19) 「感覚も意識であれば思惟も意識である。これらの作用がすべて意識であるというならば意識というのはこれらの現象には共通なる性質でなければならぬ。しかしてこれらの作用に共通なる性質はそれぞれの立場においての内面的必然の推移ということである」(3-15)。
- (20) 『自覚』で論じられたロイスの地図の例を参照のこと。それ自身は無内容な対象が、自己の内面に行為の宛先として成立することにより、対象への行為は、あたかも地図のなかに地図を写すように無限化される。
- (21) ここで「表出」について述べているが、それは内面性への回収ではない。後述する「实在のレリーフ」である「形」が、個物と個物の相互関係の独立性を維持する原理となる。
- (22) 「無世界的な傍観」に、一元的な現実の残滓を見て取ることを回避する方法として、筆者はある着想を現段階で抱いているが、残念ながら紙幅の都合上、今回は詳述することができない。

## 参考文献

- 西田 幾多郎 1949『西田幾多郎全集』岩波書店。
- Kant, Immanuel 1998, *Kritik der reinen Vernunft* Meiner.
- Odin, Steve 1996, *The Social Self in Zen and American Pragmatism* SUNY Press.
- 太田 裕信 2014「場所の論理と直観 ——西田幾多郎『働くものから見るものへ』と『一般者の自覚的体系』」『日本哲学史研究』10(5):89-108。
- 柄谷 行人 1993『ヒューモアとしての唯物論』筑摩書房。
- 九鬼 周造 1979『いきの構造』岩波書店。
- 小林 敏明 2011『西田幾多郎の憂鬱』岩波書店。
- 小林 敏明 2012『西田哲学を開く』岩波書店。
- 八坂 哲広 2017「西田幾多郎のフィードラー受容とリップスの「感情移入」説」『日本哲学史研究』12(7):142-172。
- 森野 雄介 2015「善の研究における三つの現在」『年報人間科学』36(8):53-68。
- 森野 雄介 2016「犬と絶対無」『年報人間科学』37(8):105-122。